

白門経友会

定期総会を終えて

毎年六月初旬に開催してきている白門経友会定期総会は今年で二十四回目となり、次のようなプログラムで実施し審議事項は滞りなく了承されました。

日時 平成二十六年六月七日
(土)午後二時開会
場所 中央大学多摩キャンパス
七号館七二〇三教室

プログラム

- (一) 定期総会 午後二時～二時三十分
 - ①平成二十五年事業報告・決算報告
 - ②平成二十六年事業計画・予算案
 - ③その他
- (二) 記念講演会

「アジアの経済回廊とグリーン経済」

講師・緒方俊雄教授

総会では、冒頭で谷口洋志学部長の挨拶、松丸会長の開会挨拶に続き、風間幹事長より昨年度の事業報告・決算報告ならびに今年度の事業

計画・事業予算について説明があり異議なく承認されました。

講演会では、緒方俊雄教授によりまず、ご自分の研究への動機、背景、さらに出会った海外の研究者や研究経過の概要の紹介がありました。引き続き本題の最近の十余年にかかるベトナムを中心とする環境問題、経済回廊に関してゼミ活動も含んだ詳細な取り組みについて多くの画像を提示され分かりやすく解説いただきました。

講演会終了後は、例年同様に会場を「ふらっと」に移し懇親会を開催しました。齋藤顧問をはじめ蘇州からかけつけていただいた山本先輩から現役の教員、若手の卒業生そして現役学生など二十一名が参加しました。風間幹事長の司会により参加者全員の自己紹介等を通して活発な懇談の場とすることができました。今後は総会以外でも学生を含めた交流の場を増やす所存です。

会員各位におかれましてはご多忙

総会風景

緒方教授



松丸教授



谷口学部長



とは存じますが、幹事会等へのご参加とともに一層のご協力をお願い申し上げます。(副幹事長 佐藤文博)

懇親会



記念講演会



現在と未来を繋ぐ

「エコツーリズム」その二

経済情報システム学科三年

栗原悠太

NPO法人「遊んで学ぶ環境と科学倶楽部」が行うエコツーリズムでは、神田川・日本橋川、小名木川、天王洲・芝浦の3つのコースを用意しています。中でも、「都心の水辺でエコツアー！神田川・日本橋川ナイトコース」は、第八回エコツーリズム大賞で優秀賞を受賞しています。一般的にエコツーリズムの活動が多いのは、自然豊かであったり綺麗な海となる場所です。沖縄や小笠原諸島などで綺麗な自然を体験して、その体験を通して素晴らしい環境を守る意識を芽生えさせることが一般的です。しかし、自然を大切にしたいという気持ちはある、しかしどうすればいいか分からないという人たちが大勢いました。それには二つの悩みがありました。どうしたらこの問題を解決できるか、さらに環境問題にあまり関心を示してもらえない人にどうしたら興味を持ってもらえるか、という事です。その二つの問題を解決する答えは、東京の水辺だと導いたのです。神田川や日本橋川、小名木川など東京の中

心を流れる川は、かつて江戸の町へ物資を運搬する水路や江戸城の濠として整備されたものです。こうした普段見慣れた東京の街の歴史的背景を学び、私達の生活と東京の水辺の関わりを、現在の水路の姿や江戸時代などの名残をボートで巡り、ガイドが案内するエコツーリズムツアーが都心の水辺で行われているのです。海外の状況はどうでしょうか。コスタリカでの事例をあげてみましょう。中南米のコスタリカは、エコツーリズム先進国として知られています。コスタリカの魅力と言えば、豊かな自然と野生動物です。その中で最も有名で、発祥の地の原点となったモンテベルデの自然保護区では、コケヤシダ、着生植物が木が覆う独特の生態系の森を散策できます。モンテベルデの森は標高約千五百メートルあり、一年の多くのあいだ霧に覆われる場所だけに形成される「雲霧林」という特殊な森ができます。湿度の高い森の中で、大きな樹木にくっついて自生するランやコケのような植物の種類が非常に多く、さらに生息する動物の種類も多く、生物がそれぞれの生活をしているのです。一九四九年に国軍の廃止を決定して以来、「軍隊を持たな

い国」となり、日本に近い環境にあるのも日本人の私たちにとっては親近感が湧くものです。さらにコスタリカは憲法に「国民の誰もが健全でエコロジカルにバランスが取れた環境を享受する権利をもつ」として「環境権」を明記したことで有名にもなりました。伐採される森はほとんどなくなり、コスタリカ政府は「森林破壊が止まった」と宣言しました。政府は、二酸化炭素の吸収や生物種の保全、水資源保全を金銭価値にして、国民や観光客などが、環境保全をする土地の所有者に金銭を払う制度を作りました。この制度の下では、水力発電会社は、ダムに土砂が流れ込むのを押さえるため、森林保全に出資するといった取り組みが求められます。企業や市民が支払った資金は「国家森林ファンド」と呼ばれる基金に集められ、森林保全活動に利用されたり、森林を保全している所有者への支払いに充てられます。コスタリカでは、こうした観光客を巻き込んだ国ぐるみのエコツーリズム活動が行われています。

私が所属する鳥居鉦太郎ゼミの課外活動では、日本エコツーリズム協会の「旅から始まるエコとの出会い」を掲げている言葉を研修を通じて実感しています。昨年九月一日から三日までの二泊三日で、愛媛県と高知県へ研修に行きました。これが私たちの学年にとって、ゼミで初めての遠征の研修であり、初めてゼミの仲間と知り合った瞬間でした。私たちの研修は「エコ」だけの出会いではなく、今となつては共に勉学に励み、時には語りあう仲になる「仲間」との出会いでした。カヌーの写真は、高知県四万十市の四万十川をカヌーで下っている時のものです。四万十川は「日本の最後の清流」として、とても綺麗な水質を誇っています。カヌー下りもエコツーリズムの一つです。

カヌー下りによるエコツーリズムは、四万十川の川や付近の山を身近で観察ができたり、移動するとき自然の力なので、ガソリンや電気を使いません。また、自然環境への関心を高められ、自然への配慮・理解を深められるのです。私は、カヌー下りをしてみて感じたことがあります。「最後の清流」と謳われているのにも関わらず、空き缶やゴミが少しあった事に気づきました。「このゴミはどこから捨てられたものだろう」「せっかくの素敵な自然が勿体ないよね」などの会話がゼミ生で

繰り広げられていたことは印象に強く残っています。これがエコツーリズムなのです。自然環境に対して、それらを体験し、学ぶとともに、対象となる地域の自然環境の保全に関心や興味を持つことができた観光となれたのです。また、提供者のエコツーリズムの観点からは「観光客に魅力的な地域資源とのふれあいの機会を提供する」。これが目的なのです。エコツーリズムは繋がっていくのです。伝えたい人から伝えて欲しい人へのエコツーリズムという名のバトンなのです。後ろに映っているのは沈下橋です。低い位置に架橋されることや、架橋長が短くできることから、低廉な費用で作ることができます。夏は観光客や地元の人が橋から川へ飛び込みが名物となっています。勿論、私たち鳥居ゼミ生も飛び込みました。低いといっても、橋ですからそれなりの高さがあります。しかし、「体験してこそ価値を得られるもので、エコツーリズムの一環です」と、鳥居鉦太郎先生の言葉に苦笑いしながらも実践したことは良い思い出になりました。今思うと、全員で飛び込んだのは良い思い出となり、仲間と綺麗な川に飛び込めたのは、先生の言葉の後押しもあり

ったからです。橋の上から飛び込むのは怖かったのが本音です。しかし、その他にも飛び込む勇気を後押しする要因はありました。四万十川はとても綺麗な川であり、沈下橋からの飛び込みは名物となっているからです。また、四万十市は、現在の日本一熱い街として知られています。余談にはなりますが、私は埼玉県熊谷市の出身であり、昨年八月に四万十市に奪われるまでは熊谷市が最高気温日本一の座にありました。熊谷でも、緑のカーテンを作る活動や、美味い焼き氷を食べて体を冷やそうという電力を使わない体温冷却に目を向けた活動をしていました。四万十市も綺麗な川に入って体温を冷やし、エアコンや扇風機など電力を使わないエコツーリズムができません。地域資源を生かした活動は、こうして行われているのです。

川下りに続いて、川岸に沿ってサイクリングもしました。四万十川付近は緑が多く、全員で自転車に乗り、カヌーとは違う視線で自然環境を観察できる新たな魅力がありました。カヌーでは、主に川の浸透度や魚の生態でしたが、自転車では、身近で山や道の状況を観察することができました。自転車で移動すると

いうのは、一人の大学生としては非日常のことで、気持ちよい風と景色を体感することが出来ました。

カヌーで川下り



サイクリング



この研修を終えて、エコツーリズムを通して勉強し、私たちは伝えて欲しい人から伝えたい人になりました。今、環境問題について多くの課題が指摘されていますが、自然豊かなものを見ることがよって大切にしてほしいという気持ちを持つことができました。また、現状を体感してもらうことにより環境問題に目を向け

てもらおうという団体もあります。私は思います。人は、行動し体験することにより思考の変化に一番の成長スピードを与えます。いくら机上の勉強をしていても、たくさんの方を見せられても「百聞は一見にしかず」なのです。中央大学生として「行動する知性」という信念が今回の研修に表れました。

最後にこれは鳥居鉦太郎ゼミでエコツーリズムを勉強した私からの宿題です。もし、あなたが「旅から始まるエコとの出会い」を楽しむためにはどうしたらよいでしょうか。エコを通して、あなたの大切な人にも楽しませてあげるにはどうしたらよいでしょうか。私たちの未来の子供たちに自然とともに楽しませてあげるにはどうしたらよいでしょうか。経済学部で私たちのゼミの鳥居鉦太郎先生がいつも私たちに言います。経済学部は幸せを追究する学問だと。だからこそ、あなたが考えた私からの宿題の答えを、自分自身に、あなたの大切な人に、そして子供達に伝えてください。どうすればよいのか。どうしたら地球を守れるのか。どうしたら生物が住みやすくなるのか。そして、どうしたら幸せになれるのかを。

え、あの先生が

シリーズ⑰

経済学部准教授 江川 章



二〇一四年四月に着任しました江川と申します。農業経済論を担当しています。教育職には初めて就くため、着任後は様々な場面で貴重な経験をさせていただいています。

さて、私は前職が農林水産省の研究所であり、これまで農業・農村問題に取り組んできました。そのせいか、日常生活のなかに「農」にかかわる事物をつい探してしまいます。通勤途上の車窓から眺める風景もその一つです。通勤では武蔵野線を経由して中央線、多摩都市モノレールを乗り継ぐルートを使っています。地形でいえば、荒川と多摩川に挟まれた武蔵野台地から、多摩川以南の多摩丘陵地を縦断することになります。

武蔵野台地は、国木田独歩が『武蔵野』（明治三十一年）で指摘したように、その原風景は平地林でした。今では開発されましたが、武蔵野線

の車窓からは、まだ農地を目にすることができません。それに対して、中央大学が立地する多摩丘陵地は沿線開発が激しかったせいか、住宅地が目立ち、ごく一部の緑地帯や畑地・樹園地が残るのみです。特に、モノレール沿線の景観は傾斜地に住宅地が密集しており、さながら故郷の長崎のようです。このような通勤で見かける「農」の風景は、目にする頻度の差はありますが、今後減少していく傾向にあることは共通しているといえるでしょう。

しかし、都市地域における農地は新鮮な農産物の供給といった生産面のみならず、身近な農業体験や農家と都市住民との交流の場、災害時のオープンスペースの提供等の役割を有しています。また、多摩丘陵地は傾斜地を抱えているがゆえに、山林と農地は一体となって里山の景観を形成します。

こうした「農」の景観や営みを保全しようとする様々な取組みが開発圧力のなかでも進んでいるのです。具体的には、自治体による緑地指定(八王子市、川崎市、日野市など)をはじめ、NPO法人が主体となる里山保全活動や都市住民が参加する農作業支援(援農ボランティア)を

挙げることでできます。これらの取組みは、地権者・耕作者である農家はもちろんのこと、多くの都市住民の参加によって成立しています。

たとえば、東京都が実施している援農ボランティア事業(東京の青空塾事業)をみてみましょう。この事業は東京都がJAと協力して、農作業のサポートを希望する都市住民を援農ボランティアとして養成し、人手が不足する農家に派遣する事業です。これまでに1000名を超える援農ボランティアが生まれ、三多摩地域を中心に活動しています。この活動を通して、ボランティアは農家との触れ合いや栽培の楽しさに満足を得ており、他方の農家も人的交流、都市農業の理解促進という点を評価しています。事業にかかわる両者の協同活動が都市地域の「農」の営みを保全しているのです。

この協同の取組みは、大学における教育にもいえることではないでしょうか。学生、教職員、その他関係者が一体となって大学教育を支えることが教育の質を担保し、持続させると考えます。協同をキーワードに、これからの農業、そして教育にかかわっていききたいと思います。

編集後記

今年も六月の定期総会では、皆様にご多忙の中ご協力いただきありがとうございました。

今年の夏は東京では例年と変わらず猛暑が続いておりましたが、各地で台風や豪雨による災害のニュースが相次ぎました。被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。

最近「数十年に一度」という言葉をよく耳にするになりました。そうと言われると、ついつい遠い未来のことと考えてしまいがちですが、明日起こったとしてもやはり数十年に一度です。

杞人の憂いは慎むべきですが、寺田寅彦の「天災は忘れた頃にやってくる」という言葉を改めてかみしめたいと思います。(濱岡 剛)

2014年8月31日 第55号

発行 白門経友会常任幹事会

編集 白門経友会編集委員会

編集長 鈴木 秀男

〒192-0393

東京都八王子市東中野 742-1

中央大学経済学部内

URL: www.wg-keiyukai.com

Fax: 042-673-3425